

各関係機関団体の長 } 殿
各病虫害防除員 }

福岡県病虫害防除所長
(福岡県農林業総合試験場病虫害部予察課)

平成26年度病虫害発生予報第3号(6月)について

このことについて、病虫害発生予報第3号を発表したので送付します。

予報第3号

ヒメトビウンカの防除を徹底しましょう

イネ縞葉枯病ウイルスを媒介するヒメトビウンカのすくい取り調査を5月に、飛来源となる小麦ほ場で行いました。その結果、県内平均の成幼虫数は37頭(平年33頭、前年49頭)でした。

保毒虫率は、県内平均4.9%(H25年度速報第7号)で平年よりやや低い結果でしたが、一部では高い地点もありました。今後の飛来状況に注意し、適切な防除を行いましょ



図 左よりヒメトビウンカ雌成虫、同雄成虫、同幼虫、イネ縞葉枯病の症状

<予想される向こう1か月の天候(平成26年5月31日~6月30日)>

平年に比べ曇りや雨の日が少ないでしょう。

向こう1か月の平均気温は、平年並か高いでしょう。降水量は、平年より少なく、日照時間は、平年より多いでしょう。

週別の気温は、1週目は平年より高く、2週目は平年並か高く、3~4週目は平年より高いでしょう。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

要素	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	20	40	40
降水量	50	30	20
日照時間	20	30	50

(福岡管区気象台 平成26年5月29日発表抜粋)

6月における主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

主な病害虫の発生予報概要

作物名	病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (6月の発生予報)	
		平年比	平年比	前年比
かんきつ	そうか病 ミカンハダニ	少 少	少 やや少	並 やや多
なし	黒星病	多	やや多	やや多
かき	炭疽病 フジコナカイガラムシ	やや多 やや少	並 並	やや多 やや少
果樹共通	チャバネアオカメムシ	多	—	多
茶	カンザワハダニ チャノキイロアザミウマ	多 少	やや多 やや少	多 並

注：果樹共通・チャバネアオカメムシの平年比について、現況は年次変動が大きいため、前年比としている。

作物別発生予報

予報の根拠の末尾の（ ）書きは、（+）は発生を助長する要因、（-）は発生を抑制する要因であることを示します。

【果樹：かんきつ】

1 そうか病

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（-）。

発病葉率 0%（平年 0.3%、前年 0.1%）

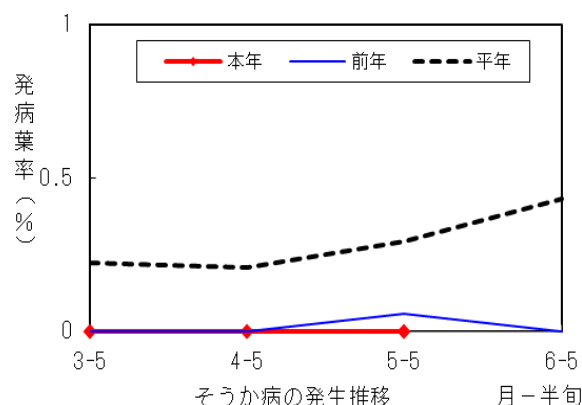
発生ほ場率 0%（平年 24.7%、前年 8.3%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並みか高く、降水量は少ないとされている（-）。

(3) 防除上の注意

ア 伝染源となる罹病葉を除去し、幼果期の防除を徹底する。

イ 農薬の使用及び散布にあたっては、p 7の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病害虫についても同様）。



2 ミカンハダニ

(1) 予報の内容

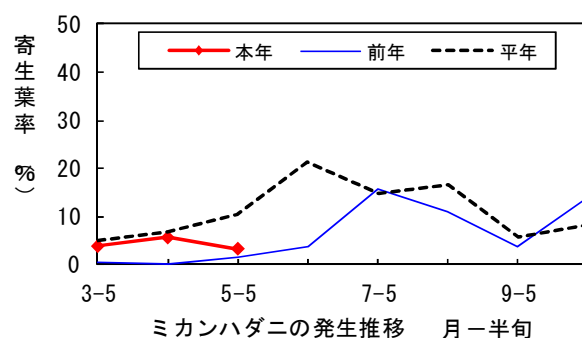
発生量：平年よりやや少、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（-）。

寄生葉率 3.4%（平年 10.5%、前年 1.6%）

発生ほ場率 45.5%（平年 54.4%、前年 25.0%）



イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並みか高く、降水量は少ないとされている(+)。

(3) 防除上の注意

ア 高度精製マシン油乳剤は、発生密度が高い場合には十分な効果が得られないので、発生が多くなる前に散布する。

なお、落花期以降にデラン剤を散布した園地では、薬害が生じる恐れがあるので使用しない。

イ 薬剤防除にあたっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。

ウ 薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤の連用は避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

【果樹：なし】

1 黒星病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった(+)。

発病葉率 1.6% (平年 0.7%、前年 0.3%)

発生ほ場率(発病葉) 63.6% (平年 44.4%、前年 41.7%)

発病果率 1.5% (平年 1.0%、前年 2.6%)

発生ほ場率(発病果) 45.5% (平年 34.2%、前年 33.3%)

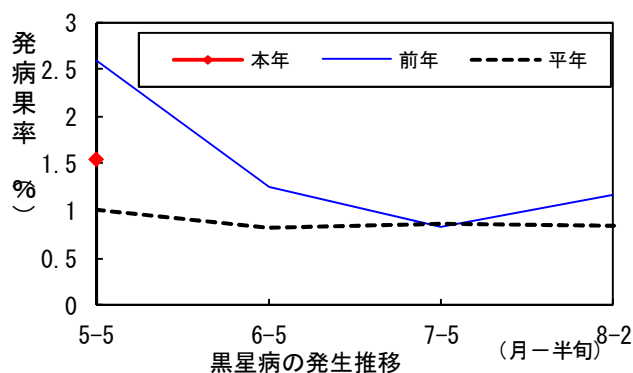
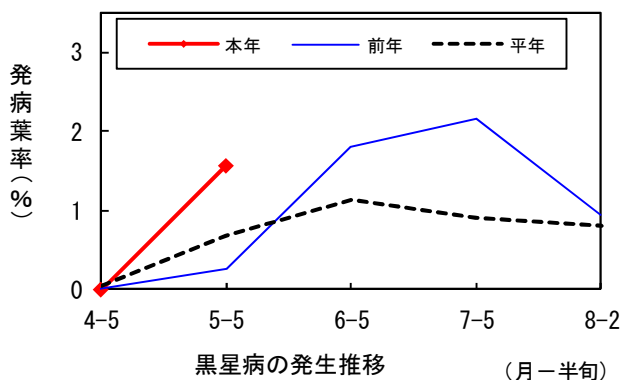
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並みか高く、降水量は少ないとされている(-)。

(3) 防除上の注意

ア 罹病葉や罹病果実は伝染源となるので、除去し、園外に持ち出し処分する。

イ 薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤の連用は避ける。

ウ 薬剤防除にDMI剤を用いる場合は、保護殺菌剤を混合する。ただし、有機銅剤は効果が低下するため混用しない。



【果樹：かき】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(+)。

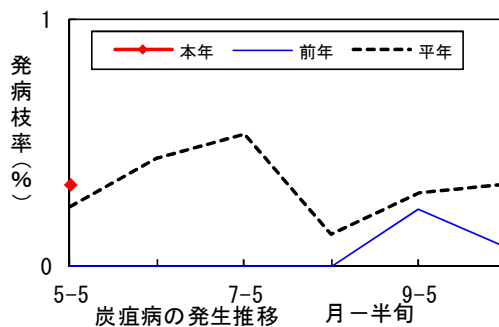
発病枝率 0.3% (平年 0.2%、前年 0%)

発生ほ場率 25.0% (平年 15.2%、前年 0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並みか高く、降水量は少ないとされている(-)。

(3) 防除上の注意

ア 伝染源となる罹病枝及び罹病果は除去し、園外に持ち出し処分する。



2 フジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－）。

寄生枝率 1.3%（平年 2.0%、前年 3.4%）

発生ほ場率 25.0%（平年 49.4%、前年 53.8%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並みか高く、降水量は少ないとされている（＋）。

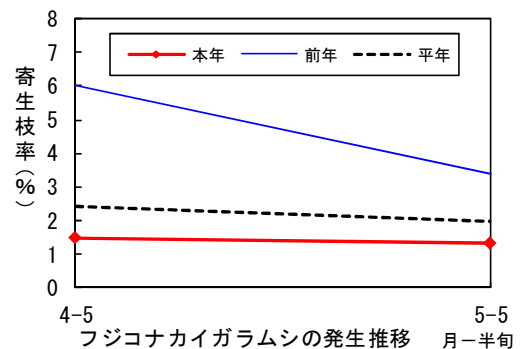
(3) 防除上の注意

ア 第1世代幼虫の孵化時期(6月上旬～6月中旬)に10日間隔で2回防除を実施する。

孵化時期はほ場によって差があるので、防除前に孵化幼虫の有無を確認する。

イ 薬剤がかかりにくい部位に寄生しているので、散布むらのないよう丁寧に防除する。

ウ 薬剤散布に当たっては、極力、天敵類に影響の少ない薬剤を選択する。



【果樹：共通】

1 チャバネアオカメムシ

(1) 予報の内容

発生量：前年・前々年より多

*チャバネアオカメムシの年度別発生概況

	(平成 26 年)	(平成 25 年)	(平成 24 年)	(多発年)
	本年	前年	前々年	平成 14 年
越冬量 (頭/㎡)	4.8	0.7	3.2	4.6
ヒナ球果着生量	－	中	少	中

(2) 予報の根拠

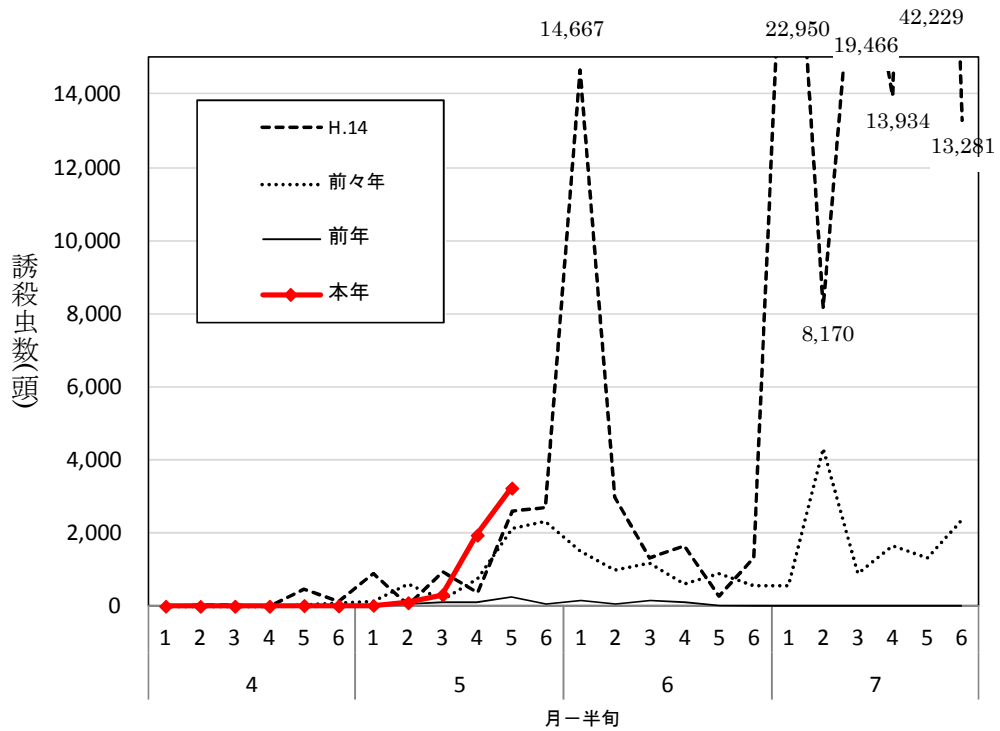
ア チャバネアオカメムシの1㎡当たり越冬量は、県平均で4.8頭（前年 0.7頭、前々年 3.2頭、平成14年 4.6頭）で、被害の多発した平成14年並で前年・前々年より多かった（＋）。

イ 5月1半旬～5月5半旬までのフェロモントラップの誘殺虫数はチャバネアオカメムシ 5,626頭（前年 510頭、前々年 3,792頭、平成14年度 4,772頭）（調査地点：筑紫野市）で、平成14年度及び前年、前々年より多かった（＋）。

ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並みか高く、降水量は少ないとされている（＋）。

(3) 防除上の注意

越冬量が多いため、普段被害を受けていない地域でもモモ・スモモ・ウメ・ビワ・ナシ園等に飛来することが予想される。このため園内における飛来状況の把握に努め、飛来を認めたら直ちに防除を行う。



チャバネアオカメムシのフェロモントラップによる誘殺虫数の推移（筑紫野市）

【果樹：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (6月の発生予報)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
かんきつ アブラムシ類	少	少	並	・適期防除を心掛ける。
なし アブラムシ類	少	やや少	少	・薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。
ハダニ類	並	やや多	やや多	
かき うどんこ病	多	やや多	やや少	・多発園では8月下旬に、同時防除を行う。
ハマキムシ類	やや多	やや多	やや多	・幼虫は葉と葉が重なった部分や、へたと果実の間に多く潜んでいるため、薬剤散布に際しては、高圧で十分量を散布する。

【茶】

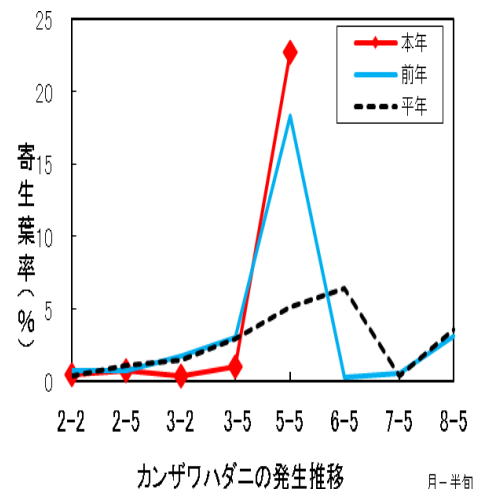
1 カンザワハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年より多

(2) 予報の根拠

- ア 5月5半月調査の結果、発生量は平年より多かった(+)。
寄生葉率 22.7% (平年：5.2%、前年：18.3%)
50葉当たり虫数 26.3頭(平年 12.1頭、前年 63.5頭)
発生ほ場率 100% (平年 47.9%、前年 77.8%)
- イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は少ないとされている(+)。



(3) 防除上の注意

- ア 発生状況をよく観察し、寄生葉率が2%以上の茶園では、速やかに防除を行う。
- イ 整枝による耕種的防除を併せて行う。
- ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。
- エ 農薬の使用及び散布にあたっては、p 7の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病害虫についても同様）。

2 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 5月5日半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（-）。

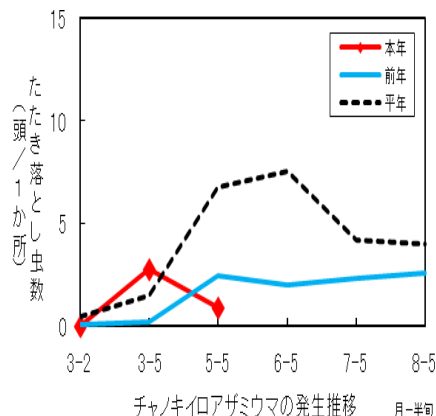
たたき落とし虫数 1.0頭（平年 6.8頭、前年 2.5頭）

発生ほ場率 83.3%（平年 85.2%、前年 77.8%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は少ないとされている（+）。

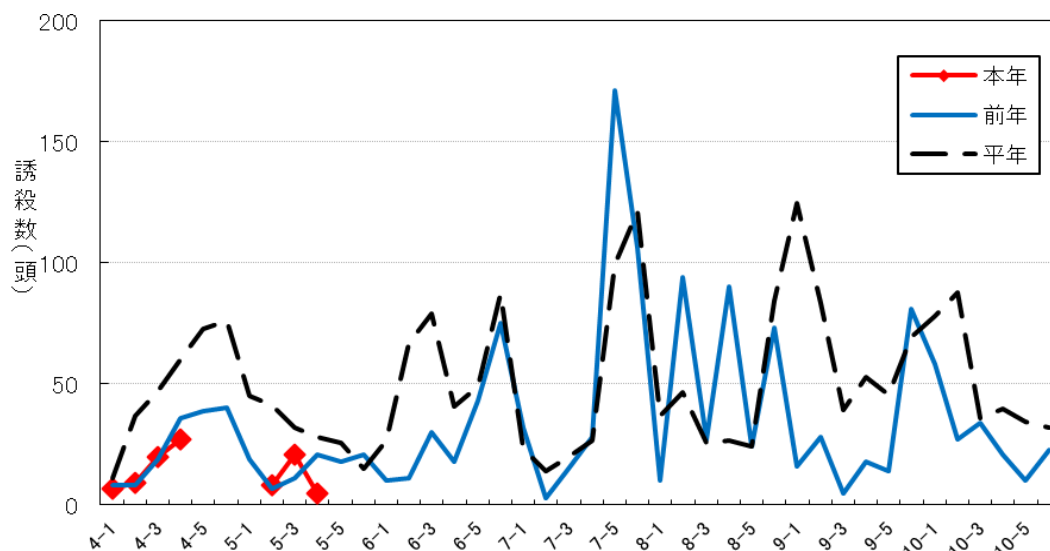
(3) 防除上の注意

- ア 一部では多発している茶園も見られることから、発生状況に注意し、たたき落とし（B 5判上）で10頭以上発生している場合は防除を行う。
- イ 二番茶の萌芽から開葉期を重点に防除する。



【茶：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (6月の発生予報)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
炭疽病	並	やや少	並	一番茶摘採後の残葉での発生に注意し、萌芽から1葉期までに防除を行う。 雨滴により胞子が飛散伝搬するので、降雨前の防除効果が高い。
もち病	やや少	やや少	やや多	一番茶摘採後の残葉での発生に注意し、萌芽から1葉期までに防除を行う。
チャノミドリヒメヨコバイ	少	やや少	やや少	発生状況に注意し、たたき落とし（B 5判上）で4頭以上発生している場合は防除を行う。 一番茶摘採後、又は二番茶の萌芽から開葉期を重点に防除する。
チャノコカクモンハマキ	並	並	並	第1世代成虫の発蛾最盛期は、6月下旬頃と予想されるので、ほ場での成虫の発生に注意し、成虫が最も多いときから7日後を目安に防除を行う。 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が見られたら直ちに防除を行う。
チャトゲコナジラミ	並 (前年比)	—	並	チャトゲコナジラミは年3～4回発生し、防除適期は若齢幼虫発生期で、親世代成虫の発生が収まった頃である。 幼虫は葉裏に寄生しているので、農薬の散布にあたっては、葉裏に十分にかかるように丁寧に散布する。 県内では、茶産地すべてで発生しているので、寄生が確認できない園でも、潜在的な寄生虫が存在する可能性が高いので、防除に努める。



フェロモントラップによるチャノカクモンハマキの誘殺数(八女市今福)

月-半旬

農薬の安全・適正使用、飛散防止対策の徹底を！

福岡県では、農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮を周知徹底するとともに、農薬による事故防止を目的として、安全使用講習会の開催や啓発チラシの配布等に関係機関、団体と一体となって取り組んでいます。

使用者の安全はもちろん、人畜・隣接作物・河川等への配慮について、ご指導をお願いします。

1 農薬適正使用の徹底

○適用作物、使用量や濃度、使用時期、総使用回数などが記載されたラベルをよく確認し、使用基準を遵守する。

※農薬の種類によっては、登録の内容がメーカーによって異なるので、ラベルをよく確認する。

(例：スミチオン水和剤40は、メーカーによって適用作物名や適用病害虫名が異なる)

2 飛散防止対策の徹底

○風の弱い時に散布する。

○風向、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

○飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフトレスノズルを使用する。

○散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

3 保護具の着用

○農薬の散布時には、ラベルの注意・警告マークをよく確認し、マスク、保護メガネ、ゴム手袋等を着用する。

4 農薬の散布後は、必ず散布器具を洗浄

○噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄する。

5 防除履歴の記帳

○農薬の散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、使用年月日、薬剤名、使用濃度、使用量等を正確に記帳する。

6 空容器の処分

○空容器は、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。

また、野焼きは法令で禁止されているので行わない。